



鹿児島日英協会 ニュースレター 第5号  
 The Japan British Society of Kagoshima  
 Newsletter No.5 October 2016

会長ごあいさつ ～ニュースレター第5号発行に寄せて～

『鹿児島日英協会ニュースレター』も今回で第5号発行の運びとなりました。

この夏（8月11日）、当協会では日頃の活動にご理解と暖かいご支援をいただいております会員並びに地域の皆様への感謝をこめて英国・アイルランドと日本の伝統音楽鑑賞会「日英音楽の夕べ」（於：キャンセビル多目的ホール）を開催いたしました。

第一部ではアイルランド伝統音楽演奏の第一人者 守安功・雅子御夫妻による素晴らしい演奏とトーク、第二部では鹿児島大学学友会邦楽部 OBOG を中心に結成された「鹿児島邦楽団」の皆様の力強い演奏が展開されました。お蔭さまで来場者は100名を超え、とても楽しく、心豊かなひとときを過ごせたとの感想をいただきました。ご協力をいただきました皆様に心より感謝申し上げます。

今後も、英国との友好親善を更に促進するため青年部とも協力しながら独自のイベント等を企画運営していく所存ですので、引き続き当協会の活動にご理解とご協力をお願い申し上げます。

鹿児島日英協会会長 酒瀬川純行（志学館大学人間関係学部長・教授）

【第2回理事会・懇親会のご報告】

① 事務局長交替

仲秋の候、皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、事務局長でありました藏本真衣様より、私、川崎琴美（鹿児島日英協会青年部総務部長）が後任者として引き継ぐこととなりました。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

② ホームページのサーバー移管

鹿児島日英協会のホームページとが新しくなりました！

新URL：<http://jbsk.jp/>

イベント等、更新いたしますので、ご覧ください。

これに伴いまして、メールアドレスも変更になりましたので、何かございましたらお問い合わせください。

新メールアドレス：[jbskinfo@jbsk.jp](mailto:jbskinfo@jbsk.jp)

目次

- ① 駐日英国大使歓迎の茶話会のこと・・・・・・・・・ p.2-3
- ② 「日英音楽の夕べ」音楽鑑賞会報告・・・・・・・・・ p.3-5
- ③ ロンドン留学を経て・・・・・・・・・ p.5-6
- ④ ～イギリス雑貨を扱う Elder Herb & Antiques + Woodwork さん取材～ p.6-7
- ⑤ イギリスひとくちメモ・・・・・・・・・ p.8
- ⑥ 事務局より・・・・・・・・・ p.8

## ① 駐日英国大使歓迎の茶話会のこと

もう昨年のことになりますが、鹿児島県と県国際交流協会は、3年後の明治維新150年のPRを兼ねて、1865年の薩摩藩英国留学生派遣から150年となるのを記念し、2月15日に駐日英国大使の講演会を開催した。そこで鹿児島日英協会は、鹿児島日英協会主催の歓迎茶話会を仙巖園・御殿『謁見の間』で開催した。その時の、鹿児島日英協会を代表しての、私の冒頭の挨拶である。

ティム・ヒッチنز駐日英国大使閣下、ようこそ鹿児島にお出でいただきました。そして鹿児島日英協会主催の歓迎茶話会に心よくご出席くださいます。誠に有難うございます。この茶話会には、島津家の皆様とともに、鹿児島日英協会および日英友好協会の幹事の皆様が閣下を歓迎して出席させていただきました。

さて、私はここ仙巖園にまいりますと、いつも思い出すのが1863年の薩英戦争のことです。ちょっとした誤解によって薩摩藩とイギリス艦隊がこの目の前の錦江湾で戦火を交えたのが薩英戦争でした。その結果、薩摩の島津の殿様や武士たちは近代化したイギリスの偉大さを知り、尊敬するようになりました。そしてわが鹿児島・薩摩の国は、明治維新前の幕末からイギリスとの交流・親睦を大いに深めたのでした。当時は外国に行くのは厳しく禁止されておりましたが、薩摩から多くの留学生をイギリスに派遣しました。その始まりが1865年の19名の留学生でした。そして、彼らは新しい日本・明治を創るために大いに貢献したのであります。

私は医師であります、医学の分野でもイギリスは近代的な医学の普及に貢献しました。西郷隆盛が招聘したイギリス人医師ウィリアム・ウィリスは1870年鹿児島医学校の校長・付属病院長に就任し、患者を治療するとともに多くの医学生を教育しました。その一人に高木兼寛がおりました。彼は1875年(明治8)にイギリスに留学し、聖トーマス病院医学校を最優秀で卒業し、1880年(明治13)に帰国し、海軍の軍医として大いに活躍しました。その結果、日本の風土病といわれた脚気の治療法を開発したのでした。彼はイギリスの手法で脚気を研究した結果、食事が原因だと結論し、米を主とした日本食からパン、肉を主とした洋食に変更したのでした。その結果、脚気の発生は激減したのでした。それがビタミンの始まりでした。しかし、問題がありました。洋食はまずいと言って、日本兵には歓迎されませんでした。海に捨てる兵士もいたそうです。

実は、イギリス大使館のインターネットを見ておりましたところ、閣下はイギリスの食文化を日本に広めるべく、「Food is GREAT」「A Taste of Britain」「ためしてみ、美味しいイギリス」をキャンペーンしておられることを知りました。もし、あの明治の時代に閣下が推奨されているイギリス料理があったなら、きっと皆が喜んで食べたに違いないと思ったのでした。

大使閣下、短い時間ではありますが、どうぞ鹿児島のおいしいお茶をご賞味いただきませうようお願い申し上げます。歓迎のご挨拶といたします。誠に有難うございました。

このような挨拶をしたつもりでしたが、歓迎の挨拶に「薩英戦争」などをもち出すのはまずいかなと思ったりもしました。しかし英国大使は、当日の講演「日英関係 19世紀と21世紀」で薩英戦争に触れて、当然と言えば当然ですが、「敵国だった英国に、留学生をすぐ派遣する柔軟な発想は驚くしかない」と述べ、幕末の薩摩藩が海外の技術や文化をいち早く取り入れ、近代化を果たした業績を高く評価されたのでした。そして、「革新性に富み特質すべきこと。21世紀にも大切な姿勢である。英国と鹿児島は国際主義に立ち、変化を恐れず行動する気質が似ている」と語られたのでした。

なお私の挨拶の後半では、イギリス人医師ウィリアム・ウィリスの鹿児島への貢献、さらにその教え子である高木兼寛の活躍を知ってほしいという意味をも込めて、話したつもりでした。そして、イギリス料理のことは、挨拶の落ちとして、ユーモアも入れたつもりでしたが、理解されたかは不明でした。

しかし、それはそれとして、歓迎茶話会はとても友好的で、楽しいトークングになり、とても有意義な茶会になりました。そして最後に、日本剣道初段の大使が留学生たちによる示現流の元気な気合いに大いにびっくりされたことで、閉会となりました。

注：(1) ウィリアム・ウィリス：イギリス人医師、明治維新政府のもと大学東校・東京大学の責任者となる。しかし新政府がドイツ医学を採用したために退任し、西郷隆盛などの勧めで、鹿児島医学校の校長・病院長に赴任した。

(2) 高木兼寛：薩摩藩士の長男として日向国諸県郡穆佐郷（現宮崎県宮崎市）に出生。陸軍軍医森林太郎（森鷗外）との脚気論争で、「食べ物に脚気の原因がある」とし、「ビタミンの父」とされる。海軍軍医総監。東京慈恵会医科大学の創設者。

鹿児島日英協会副会長 永田 行博

## ② 「日英音楽の夕べ」音楽鑑賞会報告

平成28年8月11日（木）に鹿児島市勤労者交流センターにて鹿児島日英協会主催の「日英音楽の夕べ」が開催されました。多くの会員や地域の方々にご来場いただき盛大な公演会となりました。心より感謝申し上げます。

さて、本公演会ではアイルランド伝統音楽演奏家の守安功さま、雅子さま御夫妻による英国・アイルランド音楽、鹿児島邦楽団による日本の伝統音楽を演奏頂きました。第一部の演奏では「英国・アイルランド音楽の喜び」と題し、アイルランドの民謡などたくさん



の曲を披露頂き、ご来場の皆様とトークを交えて公演し、会場は大いに盛り上がりました。アイルランドの民謡を初めて聴きましたが、アイリッシュ・フルートやアイリッシュ・ハーブの綺麗な音色が会場に響きすごく心地のよい雰囲気でした。守安功さまは来場の方々にテーマを求め、その風景や情感に合わせた演奏を行い、私たちは頭の中でその風景、またアイルランドにいるような感覚を味あわせて頂きました。



テーマの中にはモハーの断崖(The Cliffs of Moher)があり、守安さまが滞在された場所のすぐそばにあるということもあり、熱心なお話があり、素晴らしい演奏を頂きました。

ご来場の方々の中に鹿児島でケルト音楽の演奏を中心にご活躍中の“Fores”のメンバーがいらっしゃり、熱心に守安さまの演奏を聴き入っておられました。“Fores”さまには第24回鹿児島日英協会総会で演奏していただきました。ケルト音楽もホイッスルやヴァイオリン、ハーブ、パーカッションを使った美しい音色でした。

皆様が特に驚かれたのは普段日常生活で使っている“食器（スプーン）”で演奏している場面でした。様々な楽器を使って、音楽を伝える技術もイギリス音楽の良いところなのかもしれません。

第二部においては、「日本の夏の夕べ」と題して鹿児島邦楽団の方々の演奏をお聴きしました。日本をイメージする琴の音色で見事に風景を思い浮かばせ、美しい日本庭園にでもいるような気になりました。穏やかで純粋な気持ちになれるような気持ちのいい演奏でした。

名曲を奏でた尺八の音は世界に誇れるような綺麗な演奏でもありました。

私自身日本の音楽についてこれほど間近なところで演奏を聴いたことがありませんでしたが、音楽に吸い込まれるのが分かるほど胸にせまる演奏は初めてでした。貴重な体験が出来て嬉しく思いました。

鹿児島邦楽団の方々を見ると若い方々でこれからの鹿児島の音楽界が発展していくのだと思いました。イギリス民謡に負けないような盛大な盛り上がりを見せ、これからも

日本とイギリスの友好関係において音楽を通じて良い関係作りが出来ることが確信できたような気がしました。



美しい音楽の中、心地よい時間があっという間に過ぎ、気づいたときには閉会に移ってしまいました。閉会では酒瀬川会長から「音楽は日英をつなぐかけがえのない芸術だ」との講評を頂きました。またこのような機会がありましたら是非参加したいなと思いました。演奏後の懇親会では守安さま御夫妻と食事を共にし、演奏の感想や疑問に思ったことなどを語り合うことが出来ました。

守安功さまは「鹿児島の方々は熱心で公演していて楽しい。冗談にも対応していただけますしね。」とおっしゃられ、話の中でも冗談をいれながら会話され、楽しい懇親会となりました。

鹿児島日英協会青年部 副会長兼広報部 神田 浩之

### ③ ロンドン語学留学を経て

私にとってのロンドン語学留学は私の人生に最も影響を及ぼした出来事と言っても過言ではありません。私がロンドン語学留学をしたのは今から8年前の2008年でした。

ロンドン五輪を4年後に控え、ホストファミリーがとても誇らしげに五輪の事を話していた記憶があります。私が滞在していたホストファミリー宅にはブラジル人とフランス人、そしてフランス人と入れ替わりでイタリア人2人、私と入れ替わりでトルコ人と、入れ替わりが激しい家でした。私はロンドン滞在中この家で生活しこの家での生活があったから今の私があるのだと思います。

イギリスはマルチカルチャーで多人種多文化です。その言葉を頭では理解はしていたものの、実際に体験したのはやはり現場に行ってからでした。イギリスの文化は思っていた以上に私の生活してきた文化と違いました。その違いは知らず知らずのうちに体に負担をかけ、体調不良となり病院にも行きました。せっかくのロンドンなのに学校が終わると家へ帰り寝てばかりいて、何をしにロンドンに来たのか分からないほどでした。しかし最終週には気持ちも吹っ切れたのか、生活に慣れたのか、普段通り生活できていたと思います。そしてよく周りを見渡せば色々なお店が家の周りにあり、ケンタッキーも家のすぐ近くにあったことに驚きました。

私にとってロンドンでの滞在生活は消し去りたい過去でもありました。もう少し自分自身に寛大な心があれば文化の違いも受け入れることが出来たのに。受け入れることが出来



ていればもう少し楽しんで滞在生活が出来ていたのに。そう思っただけに。しかし過去は変わりませんし、この語学留学があったからこそ少しは許容範囲が広がったと思います。少し変わったことがあっても「これでいいんだ」そう思えるようになったのも、この語学留学があったからです。どんな経験も私の宝物だと思えるようになったのも8年という時間のお陰かもしれません。引率して下さった教授、当時一緒に留学した皆さん、私は元気です！ご心配をおかけしました。またみんなで当時の話をしたいですね。



鹿児島日英協会青年部 深見 さおり（旧姓：鎌田）

#### ④ ～イギリス雑貨を扱う Elder Herb & Antiques + Woodwork さんを取材～

（文責：事務局長 川崎 琴美）

今回は、イギリス雑貨を扱う Elder Herb & Antiques + Woodwork さんをご紹介しますと思います。イギリスを中心とした西欧アンティーク家具や紅茶等を置いています。店内の雰囲気がとても良く、素敵なイギリス雑貨店です。

Elder Herb & Antiques + Woodwork のオーナーである穂満京子さんに、イギリスとの出会いや魅力、お店について等、色々とお話を伺いました。

##### 1. イギリスとの出会い

「私が最初にイギリスと出会ったのは中学3年生のとき。音楽大好きだった私は、当時のイギリスでアイドル的存在だったベイシティーローラズという5人組のグループに夢中に。イギリスに行って彼らに会うんだ！という夢を追いかけて大学は無謀？にもロンドン大学に留学するつもりで。ですが案の定、猛反対に遭い断念。普通に進学、就職、結婚、退職して専業主婦という、イギリスとは関係のない生活を続けてました。」



## 2. お店をオープンするきっかけ



「子供たちに手がかからなくなってきたころ、雑貨屋さん通いが私の密かな楽しみでした。その中で出会ったのがイギリスのアーコールの椅子。形も素敵で使いやすく良いものでした。日本のものが何でも一番良い！と思いこんでいたのですが、その後はイギリスのアンティークやヴィンテージものの魅力に取りつかれてしまい、アンティークショップ通いが始まりました。その中で、福岡の英国アンティークショップのオーナーさんとの出会いがあり、

それがきっかけで5年前、アンティークを扱った自宅shopを始めることになり、昨年、正式に店舗を本名町に移転オープンし今に至ります。」

## 3. イギリスに行ってみて感じたこと、その魅力

「昨年の6月、念願だった初めてのイギリスへの仕入れに行くことが出来ました。初めてのイギリスは、やはりとても素敵な国でした。どこに行っても、親切な方々にお会いできました。街並みもアンティークの建物を保存しつつも、近代的なビルもあり、景色を眺めるだけでも楽しめました。アンティーク商品もとにかく豊富で、選ぶのが大変でした。この旅で、古いものを大切にするというイギリスの精神に触れたような気がします。」



## 4. 今後の計画

「9月末から10月初めまで、2回目のイギリスへ行くことが決まっています。どんな素敵な街並みやアンティーク商品に出会えるのか、今からワクワクドキドキです。今後も年に1～2回は仕入れを兼ねてイギリスへ行けたらと思っています。是非、鹿児島市の北部本名町の店舗へ一度、遊びにいらしてください。当店にてイギリスやヨーロッパの風を少しでも感じて頂ければ嬉しく思います。」



### 【お店情報】

住所：鹿児島市本名町 3554-1

電話：099-800-3093

定休日：木曜（イベント等で土日お休み有り）

営業時間：11時～18時

駐車場：5台



## ⑤ イギリスひとくちメモ

### English country house (英国の貴族の館)



Waddesdon Manor



Chatsworth House

主に16世紀チューダー王朝期から20世紀初頭にかけてイギリス各地に貴族およびジェントリの住居として建設された大邸宅。国王の寵を得るため、あるいは持ち主の勢威を地元の人々や他の貴族・ジェントリに誇示するため邸宅を飾り立て、多い所では数百人もの使用人を雇用していた。

産業革命による社会構造の変化や農業不況、相続税の高騰、更には二度の世界大戦等により凋落、数も減少したが、現在も1000を超える邸宅が荒廃の危機を乗り越え残存し公開されている。応接間、広間、画廊、図書室、食堂、寝室等からなる邸宅の周りには広大な風景式庭園や端正な整形式庭園、公園、農園等を持つ。

(文責：会長 酒瀬川 純行)

## ⑥ 事務局より

### ～訃報～

鹿児島に於ける医学近代化に多大な貢献をされた英医 William Willis の御子孫で私ども鹿児島日英協会の名誉顧問にもなっていたおりました河内まり代様が、永眠されました。長年のご理解とご支援に心より感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

### ～ 今後の予定 ～

\*第25回 理事会・総会・講演会・懇親会

開催日：2016年10月29日(土)

於：鹿児島県医師会館(鹿児島市中央町8番地1)

【鹿児島日英協会 事務局所在地】

〒890-8504 鹿児島市紫原1丁目59-1(志学館大学内)

TEL: 099-812-8501 Fax: 099-257-0308

URL: <http://jbsk.jp/> Email: [jbskinfo@jbsk.jp](mailto:jbskinfo@jbsk.jp)